第一巻　反復訓練

母:　この子はバニーです。彼は五歳で、生まれながらのひどい脳障害児です。彼は私達とは別の世界に住んでいます。

バニー、とてもいいですよ、バニー、そうですよ。とてもいいよバニー、バニー上を見なさい。こちらに来なさい。ネー、言ってごらん、とてもいいよ、ネー、

〜〜

来てごらん〜〜

(音楽)

母:　彼の見方は違います。感じ方も違います。そして聞き方も違います。

母:　彼は予定より三か月も早く生まれました。生まれた時は、3 ポンド(1,360グラム)ですぐに 2 ポンド 9 オンス(1,162グラム。)に減りました。その時の彼は、生きられる見込みはほとんどなく、そこで、すぐ保育器に入れられて、3 か月間入っていました。彼は何もしませんでした。でも私はとにかく、赤ん坊のことは余り知らなかったので、全然そのことは予期してませんでした。7 か月ぐらいになっても、まだ座ることができませんでした。ただ目がピクピク動くだけでした。その間医者にかかっていましたが、医者たちも、どこも悪いとは思っていませんでした。でも、地方の小児科医が頭のサイズをはかった時は、大きすぎると判断しましたが、私は早産の子供たちの頭は大きいと思っていました。そして彼はいろいろ実験をした結果、頭の中に、脳液が入っているのではないかと言われました。その理由は、生まれた時、脳の中で出血をしたからではないかとのことでした。その出血のため、脳から出ている管がつまってしまって、脳の中に液がたまるのではないか、とのことでした。

医師たちは、身体にその液を戻すために、手術をしたいと言いました。彼は 9 か月の時、病院に入り手術をしました。そして手術後、家へ帰りましたが、彼は実際に少しも進歩しませんでした。一年過ぎても何にも超こりませんでした。

(バニーが寝ている)

母:　バニーを新しいセンターへ連れて行くと、教育心理学者が三角とか丸で調べ、物理的療法士もいろいろ調べて、体の右半分にけいれんがあると言われました。一日中いろいろと実験をしたあと、あなたの子供は脳障害ですと言われました。

私は、どうしたらよいのかと聞きました。そして、一日たって、もし、その気があるなら連れてきてもいいですよ、と言われました。私は家へ帰りましたが、彼は相変わらず進展しませんでした。まるで何もなかったように、全然変わりませんでした。私とバニーの目とは視線が合いませんでした。私は彼をひっぱたきましたが、彼はしゃべりもしなければ歩きもしない。ほとんど座りもしませんでした。

その時、私はスペインの友人から手紙を受け取り、その友人の友達の子供も脳障害を持っていることを知りました。その子はフィラデルフィアに行って、新しいプログラムで良い進歩をみせているので、私にもバニーを連れていくように奨

めてくれました。バニーのために、とにかくやってみるようにと言われました。

母:　フィラデルフィアのどこに行っていいかわからないので、脳外科のユージン・スピッツ氏に連絡しました。彼は、“這い這い訓練”の方法を進展させたグループの一人です。でもバニーを“這い這い訓練”について実験する前に、もう一度手術をしなければならなくなりました。

ユージン・スピッツ博士:　手術の時、わかったことは、最初の手術の時入れておいた管が故障して、頭から脳液が身体に戻っていませんでした。そして CT スキャン（コンピューターによる断層撮影）で調べた結果、バニーの脳に災症のあとと、出血の時の傷跡があるのがわかりました。装置で調べた結果、これは子供が 1 歳になる前に発見していれば、方法もあったのです。7 か月の手術の時気づいていたならば、傷跡や炎症を取り去れたでしょう。しかし、二歳ぐらいになってしまった今では、その子に傷跡がついてしまっていて治せません。

母:　バニーは三か月病院にいて、家に戻ってきました。そして、70 年の 2 月に、主人が、バニーをフィラデルフィアに連れて行きました。そして、一週間いろいろセンターで調べ、初めのプログラムに入り、家に戻ってきた時、生まれて初めて、3 歳半になってやっと視線が合いました。5 週間ぐらいたって、彼は私達を見て手を出すようになりました。そしてその時から、私達は、このプログラムについて、本当にやってみることにしました。

（音楽）

母:　バニーに一年間ほど、プログラムについてやらせてみました。そして、71 年の 3 月に、私達はバニーをフィラデルフィアにまた、連れて行き、いろいろの評価をしました。このフィラデルフィアは、脳障害児の手当てをして、進歩させる場所でとてもすばらしい結果を残しているのです。世界各国から、親子が沢山来ます。そしてみんな同じような悲しい話をします。

誰も私達を助けることができなかったと。そしてまったく希望がなかったと。

アイルランドから、母親たちが集まり、その人達も同じようなことを言います。

女性 1:　たまには言葉を言うような真似をしますが、それだけです。

女性 2:　今、いちばん心配なことは、子供たちの将来についてです。これからどうなるかということです。

女性 3:　専門家が、「14 か月かかっても、彼女は頭があまりよくならない。彼女の頭は小さい。脳が小さいから」と言いました。ひどいですね。

女性 4:　もし、脳が悪い子がいたらどうしたらいいのでしょう。希望も何もないじゃないですか。

女性 5:　私は 1 週間たってから、デビットを迎えに行った時、お医者さんに、「何かわかりましたか」と言ったところ、お医者さんは、ファイルを見て、「あなたの子は脳障害です。一生治りません」それだけでした。

グレン・ドーマン博士:　脳が進歩するということは、ダイナミックに発

展をしていくプロセスです。ただだれの脳も進歩するとは言えません。12 歳の子供がいて、ただ 12 年間も、この世に存在しているとしても、体とともに頭も発達するのでなければ、生まれた時とまったく変わらないことになります。

これを一寸考えて下さい。この世のすべての病気について、時間をかければその病気は治ります。かぜをひいていても、時間がたてば治ります。盲腸も同じです。時間さえあればいいのです。

でも、脳障害の子供にとって、時間はかえってマイナスです。何故か――脳障害は、一日でも早く治らなければ、その子は一日年を取ってしまうことになるからです。ここにいらっしゃるお母さま方、そう思いませんか。「2 年間たったら、連れてきなさい」と言われたら、みなさん、気狂いのようになるでしょう。

2 年間遅れたら、どうなると思いますか、2 年間たった普通の子は、2 年間進みますが、脳障害の子供は、2 年間分遅れます。わかりますか？

また、彼は普通の子と同じ体をしていますね。でも、遅れています。脳の進歩は、止めることもできますし、ゆっくりさせることもできます。

それほどひどくない障害児のことを考えて下さい。彼は、8 歳になっても、4 歳の知能しかありません。この進歩は、四年分遅れてはいますが、止まってはいません。この進歩が、止まっているなら、ゆっくり勁かすこともでき、ゆっくり進歩しているなら、もっと早くもできます。止めるのでもなく、ゆっくりさせるのでもなく、早めるのです。それができなければ、私たちの仕事に意味がなくなってしまうことになるのです。

でも、10 歳の子が 1 歳の知能しかなかったなら、普通の進歩では、11 歳の時、その子の知能はたった 2 歳です。12 歳の時には、たった 3 歳です。これではいけません。もっと早く脳を進歩させなければいけません。むずかしい問題です。

では、どうしたら早くさせることができるでしょうか。

母:　ここでやることは、脱聴覚両面にわたり、継続的に、もっと判断を強くし、もっと刺激を強くし、もっと数を増やし、長さを長くすることです。

バニーのような障害児は、普通の子の進歩を、何回も繰り返さなければならないし、しかも一人一人のプログラムを変えて進歩させなければなりません。最初の大事なところは、普通の子の一年分の進歩をまねて、繰り返し、這ったり、歩くことをさせることです。そしてこの段階が一番大事です。

ここでは、本国で見捨てられ希望のない子どもたちが、プログラムによって進歩しています。

言語訓練教師:　いいかい、みんな、読むんだよ。

母:　脳障害の子供たちが、本を読む勉強をしています。

教師:　(カードを見せて、子供達が読んでいる)

母:　いいぞ、その調子だ。

今日は、バニーがここのエキスパートの人たちから、身体検査を受けて、今までの進歩を見てもらいます。

医師(女):　とてもいいよ。

(音楽)

検査員(女):　そこにあるよ、とっておいで。

いい子ね。
他にある？
バニー、とってきて。
ブラシがほしいのね、これね？
そうね、いい子ね。
そう、バニー、これからあなたをつねってみますからね。

検査員（女）：　このことを余り気にしてないようですね。強くつねっているのですけれど。

父：　そうですね。

検査員（女）：　彼の全体の感触はいいんですけれど、左手だけが悪いようですね。

父：　そう。

検査員（女）：　バニー、男の子はどこ？　男の子の写真はどこ？
男の子の写真をとって、お父さんに渡してね。
お父さんに渡して。
そうそう、よくできました。
（音楽）

眼科医（男）：　バニー、こんにちわ、お母さん、今日はいかがですか？
ところで、最近のバニーはどうですか？

母：　元気です。

眼科医（男）：　じゃ、今日はバニーを見てみましょう。あそこにある電気を少し低くして下さい。バニー、ここに何かあるか見てごらん。
見てごらん。
いい子だね。
じゃ、おめめを見せてごらん。
お母さん、よくなっているようですよ。嬉しいことですね。
（音楽）

栄養士（女）：　一番よいビタミン C はローズヒップですけれど、とても高いんです。でもやはりそれが一番良いのです。錠剤でも、粉末にして飲んでもいいんですけれど、やはり、噛んで食べるのは良くないと思います。ビタミン C はとても強いので、歯には良くないからです。

母（女）：　そうですね。私も錠剤が一番いいと思います。イギリスでは他の形のビタミン C は手に入らないし、入るとしても百ミリグラムか百五十ミリグラムしか買えません。

栄養士（女）：　そうですね。私もそう思います。でも液状のビタミン C もありますが、水と一緒に飲むから、子どもの体内に水分が多くなりすぎるので良くないと思います。まあ、それは簡単な方法ですけれどもね。
それと同様に、ビタミン B を飲んでもらいたいですね。ただ大切なのは、ビタミン B のそれぞれの種類、B1、B2、B6 をそれぞれ、同じ量だけ飲まなければならないということです。
（音楽）

検査員（男）：　バニー、よくできたね。
違う、違う。こちらの手でやりなさい。
よし、できた。いいぞ、バニー。

バニーが何がほしいかわかったよ。
バニー、ほら、取りに行きなさい。
そうだよ、上手だね。
あなたはそこにいて下さい。這わせますから。
父:　いいですよ。
検査員(男):　ほら、バニー。お父さんが何を持っているか見てごらん。
バニー、反対を向いて、そうだよ。
バニーが這っているのを見て下さい。
よくできた。
お父さん、それを一つ上げて下さい。
じゃ、もう1回やらせてみますが、いいですか。
お父さんが何を持っている？
取りに行ってごらん。
そうそう。
どうしたの、這いたくないの。立って歩きたいの？
じゃ、歩いてみよう。
じゃ、バニー、歩いてみなさい。OK。
バニーは走ったことがありますか？
父:　たまに走ります。
検査員(男):　そうよ、バニー。おいしいかい？
それが好き？
バニーが歩くとき、この右手はいつも上がっていますか？
父:　はい、上がっています。
検査員(男):　バニー、またほしい？
バニーが歩く時、右足の指先で立たないでしょう？
父:　そうですね。
検査員(男):　左足の指にさわったとたん、かかとをすぐ下ろすのでしょう？
父:　はい、そうです。
検査員(男):　じゃ、私がいま見ているバニーの歩き方が、いつもの通りですね。
父:　はい、そうです。
検査員(男):　大変、結構です。それから「ナーナー」と言うのを聞きましたが、「ノーノー」と言っているのでしょうか。
父:　はい、そうです。それからもう一つ、「ゴー　アウェイ」とも言います。
母:　「ウァント　モアー」と言うようになりました。
検査員(男):　外に出たい時、「アウトサイド」と言いますか？
父:　このあいだ、ドアが開いている時、外に行きたいという動作をして、何か一言しゃべりました。もしかしたら彼が「アウトサイド」と言ったのかもしれません。
検査員(男):　でもそれは、確かかどうか、はっきりしないんですね。
父:　はい、そうです。
検査員(男):　そうなるとバニーは現在、3 つから 5 つぐらいの単語をしゃべれると考えられますね。ふつうに聞いた言葉では、わからないかもしれませんが、お父さんやお母さんとしては、バニーが必要としていることについてはわかりますね？
父･母:　ハイ。
検査員(男):　バニー、きみは話し始めたんだよ。
(音楽)

検査員(女)：　もうプログラムについてゆけるようになりましたか？　慣れてきましたか？

父：　そうですねえ。5 分間について言えば、最初は 50 種類くらいしか動作がなかったんですけれど、今では 250 種類もの動作をします。バニーは、このパターンについて、とても慣れてきました。

母：　バニー、手を見せて。

そうよ、いい子ね。

(音楽)

デラカート博士：　月に人類を送ることができても、私たちには、子供に話す方法を教えることができません。複雑な技術的な問題について解釈することはできますが、人間を進歩させることはできません。とても残念だと思います。

ある批評家たちは、私たちは自分では失望していながら、親たちにはいろいろなことを約束していると言っています。希望とは何かという問題は別として、現実を信じるか、信じないかが問題だと思います。まあ、それはそれとして、バニーは大きい音について、どんな反応を示すか調べてみましょう。

バニー、聞いてごらん、聞こえるかい？

好きなようだね。

バニー、もっと大きい音を出すよ。

好きなんだね、好きなんだね。

さあ、もう一度やってみるよ。

ああ、やっとバニーに通じたね。

もう一回いくよ、バニー。大きい音だよ、バニーは、大きい音が好きなんだね。

これからバニーについて、こういうやり方をしてみましょう。まず第一に、何か期待できるかもしれないので、刺激を与えてみます。いろいろな音を出して、耳には、よく聞こえないのか、聞こえすぎるのかわかりませんので、小さい音と、大きい音を混ぜて聞かせます。

ここで、お父さんとお母さんにも手伝って頂いて、お母さんが大きい声で話し、お父さんが小さい声で話し、それを繰り返してやってみましょう。

バニーの表情が変わったのが、わかりましたか？　なぜなのか、私にもよくわかりませんが。

音が大きくて手でさえぎったり、音が小さくて耳を傾けたりするような子は、表情が変わります。

もう一回、やってみますから。バニーの表情を見ていて下さい。

これから私たちのすることは、彼の口から発せられる言葉を理解するような方法を、考えなければなりません。今やったことで、彼は音に反応することがわかりましたね。私たちがしなければならないことは、彼の言葉のコードをくずすことです。

昔の話ですけれども、音しか口から出さないある男の人がいました。そしてここへ連れて来られたのです。その時私たちは、その男に、「君が、我々の言葉を聞きとることができるということは知っているよ。ただ君は、我々に自分の意志を伝えることができないだけなんだと思う」と、言ったとたん、

彼は安心した声を出しました。

これと同じように、バニーは聞くことはできても、話すことはできないのではないかと思います。今までのバニーは、フレーズを受け取ることはできましたが、一つ一つの言葉はわかりませんでした。そして話すこともできませんでした。しかし、親として大体の意味は理解できるようになってきたと思います。彼に一言ずつ教え、言語能力を与えていけば、これから話すことができるようになると思います。特に、彼の口から発せられる音は、悪いとは思いません。ただ、話し方さえ変えればよいのだと思います。

はい、何か御質問は？

検査員（男）：　これから以前の検査と比べて、どれだけバニーは成長しているかを見てみましょう。この前の時と比べ、バニーは、まず歩いています。バランスは、まあまあな方だと思います。ただ右手の力、バランスもちょっと弱いですね。右手でつかむ時の手の力はとても弱いです。この点では、バニーはあまり成長していません。

次は言葉について。バニーは現在、3 つから 5 つくらいの言葉を知っています。全体として見てみると、バニーの成長は決して悪くはありません。ただ右手の使い方を、左手の使い方のように成長させることですね。

お母さん、何か質問はありますか？

母：　これからのことですが、バニーの成長をどう、うながしていったらよいのでしょうか。心配です。

ドーマン博士：　こちらとしては、これからバニーに、読むことを教えたり、目でいろいろな新しいことを見させ、脳を刺激することをします。とにかく、バニーの受動能力と、能動能力とに力を入れてやっていきたいと思います。これで、バニーに自信をつけさせる一つの方法となるでしょう。

ドーマン博士：　今度来る時までに、バニーの言葉の数を増やし、もっとしゃべれるようにします。多動性を少なくさせ、バランスをもっとつけさせます。バランスといっても、ただこの地球のうえにバランスよく立っているというだけではなくて、バニー自身が、いつもどこにいるのかわかるようなバランスをつけさせることです。

バニー、君は質問はないか？

バニーは、ずっと集中して聞いていますね。そういう集中力を、私たちのパターンに反映させ、正しいか正しくないかをはっきり教える。それが彼にとって、一番有望になることでしょう。バニーの集中力はふつう見なみで、親たちが願っているようなものです。この集中力を利用して、それをさらに育て、自分で何かについて判断できるように教えます。

お父さん、お母さん、何か質問はありますか。

父･母：　いいえ、ありません。

ドーマン博士：　では、次の成長を調べるときまで、神とともにありますように。